
 記 事

例会記録

日本医史学会 11 月例会

平成 30 年 11 月 24 日 (土)

順天堂大学 10 号館 1 階 105 カンファレンスルーム

1. 明治期の開業医・狩野謙吾の生涯
—— 臓器療法の発見者から神経衰弱の専門家へ ——
山田真由美
2. 映画『夜明け前』 呉秀三と無名の精神障害者の 100 年
(特別試写・解説 岡田靖雄)

 日本医史学会・日本薬史学会・日本獣医史学会・
 日本歯科医史学会・日本看護歴史学会・洋学史学
 会 合同 12 月例会

平成 30 年 12 月 15 日 (土)

順天堂大学 10 号館 1 階 105 カンファレンスルーム

1. 緒方洪庵の薬箱研究を可能にした大阪大学所蔵ケン標本の意義
日本薬史学会：高橋京子
2. 鹿のプリオン病——慢性消耗病 (CWD)
日本獣医史学会：小野寺節
3. メガロドンの歯の化石に対する本草学者と蘭学者の考察比較
日本歯科医史学会：松山知明

4. アメリカ国立公文書館史料再考

—— 史料を活用したバイオエシックス教育の取り組み ——

日本看護歴史学会：丸山マサ美

5. 『解体新書』扉絵の書誌的研究

洋学史学会：安江明夫

6. 日本における屍体解剖の黎明期について

—— 社会文化史的な視点からの再検討 ——

日本医史学会：ヴォルフガング・ミヒェル

日本医史学会 1 月例会

平成 31 年 1 月 26 日 (土)

順天堂大学 センチュリータワー北 405

1. 富士川游学術奨励賞 受賞記念講演
19 世紀における西洋美術解剖学の歴史：
日本の美術解剖学の前史として
加藤公太
2. 国民優生法，優生保護法と精神科医
岡田靖雄

例会抄録

あの闘争とはなんだったのか

—— ぼくの場合 ——

岡田 靖雄

かつての大学闘争の意義は、当時のその人の立ち場によっておおきくちがっている。1956 年医師免許取得。東京大学の精神科に入局したが、大学病院には臨床はないと 1958 年都立松沢病院にうつった。ひたすら患者をみながら、精神科医療

の改革にとりこんでいたが、しばらく外をみたいという気もわいた。1966 年に定年をむかえた秋元波留夫教授の後任にえらばれた臺弘さんは松沢の先輩であった。

臺教授から東京大学にくることを要請されたと

きに、4年で松沢にもどることを条件に東京大学にうつった。1年後には医局長に選出された(任期1年)。臺さんは、相手の立ち場をかंगाえぬ気まぐれな言動が目だった。医学部闘争がはじまったなかで、1968年2月に、上田内科事件(上田病院長をまもろうとした医局長に抗議して研修医などが病室そばの医局でさわいだ)がおき、精神科医局員がその先頭にたっていた。病室区域で夜さわいだということで、臺教授はその医局員を除名しようとした。医局会議は反対したが、教授は“医局員と一体となって医学部の事態にあたっていきたいが、この処分がうけいられぬなら自分の進退も考慮する”というので、医局会議はしぶしぶその除名処分をうけいれた。

上田内科事件への誤認処分につき医学部首脳の実責任をとるべきだとの声に、教授は自己保身的な言動をくりかえした。さらに11月に、あたらしく選出された医学部長は海外出張中の臺教授を病院長に指名した。帰国した教授に、病院長をうけぬように、おもだった医局員が進言したが、“新聞にでちゃったから”との答えがかえってきた(翌年2月には、医学部長・病院長は辞任においこまれた)。1969年1月秩父宮ラグビー場で7学部集会、そして5月には医学部医学科も授業再開。

一方日本精神神経学会で臺理事長は理事会を拠点として学会認定医制度発足を強行しようとしたが、足元の医局員を説得しようとしなかった。そして1969年金沢での総会で日本精神神経学会理事会は不信任された。

1968年10月に精神科の医局会議は医局を解散して精神科医師連合を結成した。連合は11月には臺教授不信任を可決した(まじめな保守派も不信任に同調した)。1969年4月に連合は有給者の公選を目ざして、有給者(教授、助教授をのぞく)の辞表提出をもとめた。この段階で8名の有給者はそれに反対して、病棟部分(医局、研究室はこちらにあった)をさって、中央診療棟の精神科外来部分にうつった。そして、連合とはべつの外来会議をひらき、これは教授をいただく教室会議となった。

病棟は連合による自主管理体制となった。この連合は授業拒否をつづけた。連合にのこる有給者は5名であったが、3名はそれぞれの理由で辞職し、のこるはぼくほか1人。連合の委員長は保健センターにでている講師だったが、病棟業務はしなかった。それをになったのは、外にでていた医局員である。病棟は2グループからなり、ぼくはその一つを担当指導していた。別グループへの新規入院をめぐり看護部との摩擦を生じ、そちらの指導医は“医者ということがきけぬのか”とどなった。看護部は2名をのぞいて外来側へさった。

病棟の研修医たちは、ここでは診療よりは自主管理の維持が大事だと、診療をおこたりがちであった。病棟のあいだ部分(旧外来部分)には外部団体がいきこみ、火災瓶づくりもそこでおこなわれた。病棟側・外来側の医師のあいだに小暴力も発生した。病院首脳部は、病院の端の精神科病棟での争いは黙認するという態度をとっていた。

闘争中心では医者としてやっていけないと、ぼくは1972年4月には東京大学をやめた。精神科医療改革の先頭をきってきた者が、総括できずに闘争の場をさる責任を感じたぼくは、精神科医療界では29年にわたり謹慎の態度をとってきた。臺教授は1974年無事定年退官。精神医学教室の組織が統合されたのは1996年である。

あの大学闘争は日本の社会になにをもたらしたのか。とくに医療界ではその歴史的評価はほとんどされていない。日本精神神経学会では、よいことはいが実行はかならずしもともなわず、他人への攻撃ははげしいが己れにあまい、という傾向が目だった。当時ベストセラーになった羽仁五郎『都市の倫理』(1968)の企画・編集に関与した。羽仁は時代のアイドルスターとなったが、羽仁こそが他人をはげしく攻撃するが己れにあまい人であるとわかった。あの人が戦後左翼の雄であったのはどういうことか。ぼくがかかわってきた戦後史とはなんだったのか。

(平成30年1月例会)